

親仁さんと旦那

池田 隆

今では魚屋チェーンが広域に展開し内陸でも新鮮な美味しい魚が安く手に入るようになった。だが昭和の末に横浜郊外の新興住宅地へ越した頃は苦慮したものだ。八百屋や豆腐屋と同じく魚屋が近くにない。スーパーマーケットでラップされた魚が並んでいるだけである。

しかたなくかなり遠い卸市場の隣の魚屋まで車で買い出しに出掛けた。一心太助を商標にしたその店で目利きするのが休日の楽しみとなる。しかしある時とつぜん焼肉屋に変わっていた。

しばらく途方に暮れる日々が続いた。ところが自宅近くに地元の人が経営するミニスーパーがあり、その片隅に魚を並べたコーナーが新たに設けられた。高級魚はなく鰯や鰯、鮭、カマスなどの大衆魚ばかりだが、生きは良さそう。一心太助が齢を重ねたような人が横に立っている。このような店では珍しいことだ。

「今日の御薦めは？」と問い、話し込むうちに気が合ってくる。以来週に一二度は散歩や通勤の途中で立ち寄るようになった。以前は別の所で店を一軒構えていたが、何かの事情で他人の店の一角を借りるようになったらしい。齢は奇しくも私と同じ。魚捌きが根から好きで細々でも生業を続け、毎朝三時に起きて魚河岸へ出掛けるという。

行く度に「親仁さん、今日の御薦めは？」と切り出す。すると「旦那、これは脂が乗って旨い」などと勧めてくれる。その日のわが家の献立は彼の意向で決まっていく。何かの魚が欲しいときには、前日に頼んでおくと特別に仕入れてくれるし、塩焼きや干物用には程よく塩を振っておいてくれる。

ある時は何時もの問いに「今日は旦那に勧める魚はないなあ」との応え。未だ魚が多数並んでいるのに、横にいる女将さんは渋い顔。だがこの一言で彼に対する私の信頼は絶大になった。酒好きだというので、暮れにはお礼に一升瓶一本を届けていた。

何年か後、そのミニスーパーも大手スーパーの進出で急に店を閉じた。親仁さんと旦那は互いに名前も知らないまま縁が切れてしまう。